

除去土壌等の減容等技術実証事業

Young Student's Contribution to Public Relations for Reuse of Very Low-level Contaminated Soil Generated by Decontamination of Fukushima

Upper grade students of NIT(KOSEN),Fukushima college have learned actively the status of interim storage, R&Ds for reuse of very low-level radioactive(VLL) contaminated soil towards final disposal of soil in Fukushima through a seminar, field works. After the active learning, they have challenged public relations for reuse of VLL contaminated soil under consideration of the local encountered difficulties. Finally effectiveness of these approaches has been discussed.

1. 概要

東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴う除染により生じた除去土壌等は、大熊町・双葉町に整備が進められている中間貯蔵施設に運搬され、中間貯蔵開始後30年以内に福島県外で最終処分されることとなっています。除染により発生する除去土壌は1,330万㎡（帰還困難区域を除く）と推計されており、減容化等の技術開発が進められています。本校では、アクティブ・ラーニングを通して学生が除去土壌等の再生利用等について正しく理解するとともに、地域住民との対話により理解醸成を進めるアプローチ手法の実践に取り組んでいます。

2. 理解醸成のための課題解決型アプローチ

本事業では、①学修プログラム、②フィールド・ワーク、③理解醸成に向けた取組の3つの取組を柱として、事業を推進しています。

① 学修プログラム

中間貯蔵、減容・再生利用、最終処分に関する基礎的な知識、技能の習得のため集中講義を実施しています。講義の中ではPBL(Problem-Based Learning)やIBL(Inquiry-Based Learning)を取り入れたグループ討論も行い、学生の探求心や課題解決能力を養うことも目的としています。

② フィールド・ワーク

知識を習得するとともに、現状や問題点を主体的に把握することを目的に、中間貯蔵、減容・再生利用、最終処分に関する研究開発等の施設や現場の見学を実施しています。

見学予定施設等

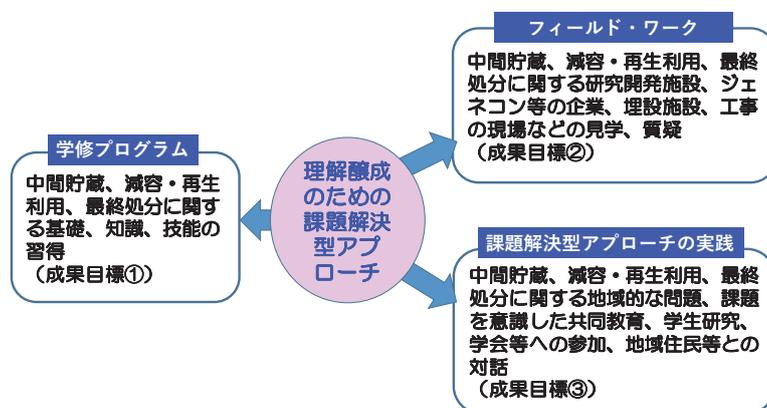
再生利用実証事業施設、中間貯蔵施設、飯舘村環境再生事業施設、特定復興拠点（大熊町等）等

③ 理解醸成に向けた取組

学生研究等及び若者（高専生と同年代の学生）と地域住民等の対話に基づく理解向上の2項目を実践し、理解醸成の効果を検証します。

実施項目

- ・学修プログラムの準備、検討、実施
- ・地域の若者を中心とした再生利用の理解醸成事業の具体化に向けた検討



地域住民との対話



理解醸成に向けた取組（花舞台の作成）